

平成 29 年 1 月 18 日

大学間連携によるアンチ・ドーピング研究の推進について（共同声明）

東京大学総長	五 神	真
東北大学総長	里 見	進
筑波大学学長	永 田	恭 介
日本医科大学学長	弦 間	昭 彦

スポーツは世界共通の人類の文化であり、心身の健全な発達、健康及び体力の維持増進、青少年の人格形成等、社会を支える多面的な役割を担う。また、スポーツ選手の不断の努力は人間の可能性の極限を追求する営みであり、こうした努力に基づく選手の活躍は、人々に夢と感動を与え、人類社会に活力を生み出すものである。

一方、ドーピング（註）は、アスリートに健康被害をもたらすのみならず、スポーツの基本的理念であるフェアプレーの精神に反する行為であり、社会の発展に多様な形で貢献するスポーツの価値を損なうものであることから、その撲滅に向けて、世界的には世界アンチ・ドーピング機構（WADA）、我が国では公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）を中心として、教育・啓発活動、研究開発活動及び国際連携活動等の様々な取り組みが進められてきた。

しかしながら、近年はドーピングの巧妙化が進んでおり、最先端の医学研究の成果や微量分析等の技術を活用した効果的かつ効率的なドーピング検出手法の開発が必要となっている。また、アスリートへの精神的・身体的負荷が少ないドーピング検査の開発も求められている。

これらの課題に対応するため、東京大学、東北大学、筑波大学、日本医科大学は、共同してアンチ・ドーピング研究のためのコンソーシアムを結成し、緊密な連携を図りつつ、アンチ・ドーピング研究に係る様々な分野（自然科学領域・社会科学領域）において研究の推進に取り組むこととする。4大学が連携することにより、各大学の有する研究リソース（知見・人材等）を効率的・効果的に活用し、研究をいっそう加速することができる。

また、今後は他の大学・研究機関との有機的連携を図り、我が国において世界の範となるアンチ・ドーピング研究体制を構築することを目指す。

本取り組みによる研究開発は、ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会等の世界的に注目を集める大規模国際競技大会をドーピングのないクリーンな大会とするために不可欠なものである。また、本取り組みを通じて医学研究や関連分野の技術が発展することにより、来るべき超高齢社会における健康長寿の実現にも貢献することが期待される。我々 4 大学としても全力で取り組む所存である。

以 上

（註）競技能力を増幅させる可能性がある手段（薬物あるいは方法）を不正に使用すること。